

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

三春わが街

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

■コミュニティだより

VOL. 63 (年4回発行)

■発行日 平成24年3月31日
■発行 三春まちづくり協会
■編集 三春まちづくり協会広報部会
三春町字大町178 (旧公民館内)
TEL/FAX (62) 3988

出前懇談会 レポート

今、三春町の「最重要課題」を考える！

— 三春町議会議員との懇談会⑧から —

去る二月八日、交流館まほら学習室において第四十五回出前懇談会「三春町議会議員との懇談会」が開催されました。今回で八回目となる町議会議員との懇談会には、今までの地区内在住の議員に限って出していた案内を、全議員対象に広げ参加を要請しました。

当日は、陰山丈夫議員、渡辺泰譽議員、佐藤弘議員、日下部三枝議員、三瓶文博議員、小林鶴夫議員、渡邊勝雄議員(議員番号順)の七名が出席し、三春町の抱える様々な課題のうち「今、最も重要と考える課題」について説明されたあと、参加した町民の皆さんとの質疑応答、意見交換を行うなど、活発な懇談会となりました。

本号では、出席された議員の方々の説明と質疑応答の模様を中心にレポートします。なお、紙面の関係上、発言内容等を要約して編集してまいりますので、あらかじめお断り致します。



はじめに、改選後初の懇談会なので、自己紹介を兼ね「今、三春町にとって、何が最も重要課題と考えているか」を各議員から話していただきました。

その結果、時機を反映して福島第一原発事故による放射能汚染に関わる課題を挙げた議員が三名。財政状況の改善に関する課題と挙げた議員が二名。財政と除染、少子・高齢化等を列挙した議員が二名でした。

根拠、対処策等についての見解は議員によってそれぞれ異なっていますが、課題ごとにその概要をまとめました。

【福島第一原発事故による放射能汚染に関わる諸課題】

- 除染等放射線対策が急務。三春町で安心して子育てができる安全・安心のまちづくりが一番重要と考える。国や県の後処理を負うのではなく、責任の所在を明確にし、将来を見据えた子育て支援の行政を進めることが必要。町が、行政事業の後れを、除染対策を理由に転嫁しないよう監視する態勢も必要かと考える。
- 避難者の受入れ対応を通して、行政組織のパワーと全地区民の結束力が発揮できた。自主防災会の体制確認もできた。これからは、仮設商店街の立ち上げ等明るい話題で地域ぐるみの新たなコミュニティづくりが必要。
- 除染作業を如何に適切に実施し、子供たちを健康で安全に育てる環境や条件づくりを進めるかが



【財政状況の改善に関する諸課題】

- 町財源における自主財源比率を如何に維持、拡大するかが重要と考える。平成二十四年度では一億

最も重要と考える。

国は、県の要望を無視し、一方的な政策を進めようとしている。事態収拾には、継続、長期的な取り組みが必要。医療費の無料化を国会で議員立法の動きがあるようだが、十八才以上の県民のフォロワーのあり方を求め各自自治体は国会へ働きかける積極性も必要ではないか。

【財政と関連させた諸課題】

- 少子・高齢化の対応が緊急課題。少子化は、小学校再編につながり、若者は町外修学、県外就職へ連鎖する。地元で、職場がなく、結婚・出産・定住化を具体化するためには、大学誘致や職場誘致の検討等に大胆に取り組む必要がある。
- 高齢者福祉は、健康で元気、生き甲斐を持てる地域環境をつくり日常的に気軽に集まれる場所づくりも大切。
- 除染事業を雇用しに直結させる。財政課題では、民生費が増大するし自主財源は先細りの傾向。近隣する郡山市というマーケットを展望した地域財政サイクルを見通す独自の政策、避難者の方々を含めたまちづくり等大胆な発想の転換も必要と思う。

各議員からの話の後、出席者との質疑、応答による懇談が行われました。

- ◇ 全町除染に関連して、汚染廃棄物の仮置き場の設置はどのような状況になっているのか。
- ◇ 最終的な確定の説明は得ていない。全員協議会での模様では、各地区で難航していると聞いている。
- ◇ 新中学校建設工事に関して、地元企業の活用・調達の達成状況や、未達成の場合のペナルティ及び中間監視の機能はどのようになっているのか。
- ◇ 関連工事業者の選択は、元請の大林組がする。受注契約の過程で、電気・土木等地元業者等の下請けを可能な限り採用するよう要請はしている。受注額の30%程度を目安としているが、具体的な現在の数値は承知していない。未達成の場合のペナルティは特にないと聞いている。
- ◇ 東日本大震災復興資金等の動きはどのようになっているのか。
- ◇ 復興基金として三億六千万円の交付を受け、除染以外に使用し一般会計へ借り入れも可能である。
- ◇ 大学誘致や住宅政策について今後どのように具体化する考えか。
- ◇ 町民の皆さんが考えやすい課題(素材)を提供する。町民の盛り上がりから具体的な取り組みへ形づくる。
- ◇ 町営住宅充実策では、桜ヶ丘(旧雇用促進住宅)のように震災の避難住宅としての利活用もある。
- ◇ 北山地区(下舞木)のような住宅環境も好評で、永住を希望するニーズはまだまだあると考える。
- ◇ 古民家や空き住宅の再利用を斡旋することはどううか。
- ◇ 古民家の再活用は費用がかかり一般的でないと考えるが、空き住宅の情報を町等が提供することは有効である。
- ◇ 自主財源の確保拡大についての具体的な方策はどのように考えているのか。
- ◇ グループホーム、デイサービス等は、介護施設やサービスに付随する人材育成まで高齢社会の産業性があるし、企業誘致等による生産人口増の政策に総合的に一大プロジェクトの創設がある。これにより地域で金が廻る仕組み作りが出来るのではと考える。
- ◇ 先の議員との懇談会でも、議員定数と議員報酬のあり方について、財政削減の観点から議論になった。その後の議会で議員定数削減の条例案が否決された。今回の改選で当選された議員の方々に、この事についてお考えをお聞きしたい。
- ◇ 地方の高齢化を考えると、少数精鋭と若い人の参画等議員定数や、議会運営のあり方を検討することも必要。
- ◇ 議員報酬は、年額約三百五十万円程度で、若い人がこれで生活できるほど

〔裏面へ続く〕

◆ 高額とは思われない。定数減の課題は議会運営の方法で対応できる。議会の話なのに町民から遊離している。議員からのアプローチが必要。

◆ 現法制下では市議会以上は生活給を含む町議会が活動費。若い人でも議会活動を可能にするには議会運営の改革が必要である。

◆ 財政上の要素だけで判断は出来ない。議員定数等について国会でも議論しているが、三春は三春のやり方を考えることが大事。

◆ 常任委員会の数から見ると現在の定数で妥当。委員会を統合すれば定数減は可能であるが、町民の意見の反映をどのようにかバーするか、町民の総意として議会での決議が適正に行われる事が重要。

◆ 現状では、定数減によって地域格差を生じさせる恐れも考えられる。定数削減しても財政減にならない状況であれば、多くの意見が反映できる現状が良い。

◆ 定数減しても議会運営次第で適正に出来る。常任委員会制方式の限界を感じる。議案は、全員で討議するなど、改革を真剣に検討する時期と考える。

◆ その他、議員の定数や報酬・議会運営のあり方・除染廃棄物の仮置き場等数項目について質疑応答がありました。紙面の関係で割愛します。

【特集】

『3・11』あれから1年！

『東日本大震災+東電原発事故』②

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、東日本大地震が発生、その後襲った大津波は多くの人命と財産を瞬時に奪い去りました。更に、翌十二日東電福島第一原発の原子炉から放射性物質が飛散する事故が発生し、大震災による直接的な被害が比較的少なかった三春町でも、この原発事故による影響は、健康への不安や風評による経済的・精神的被害など様々な形で、未曾有の混乱を巻き起しました。

「あれから1年」、頻発する大小の余震、修復が終わらない道路・家屋・墓地の石碑に加えて、未だに収束の見通しが立たない原発事故の影響等大震災の後遺症が引き続いて現況です。発生からこの一年、行政、防災、福祉等地域住民の暮らしと安全に色んな立場で活動された方々から、それぞれの立場で活動された思いを寄せていただきます。

「大震災から一年」

大町区長 村上 弘

大震災が起こって一年が経ちました。その時、私は歯科医院にいました。「外に出ましょう」声をかけられ初めて、腰がヌケルというのはこのことかと思えました。あまりのゆれの大きさに、びっくりして立てなかつたのです。動けなかつたのです。

町の災害対策本部が福祉会館に設置され、すばやい対応がされていました。未曾有の大災害時に、消防団の幹部、町の幹部が対策本部で指示しているすがたがとも頼もしく、安心しました。代表区長で地区災害対策本部が設置されて避難所への救援物資等への協力を、各地区にお願いしました。

毛布を預かっている時、ある人が「昔、大学の教授が『原発に手を出すなんて』と怒っていた」と言っていました。いつの話と聞いたら、「五十年前の話だよ」と言った。ため息だけが出ました。

小さな町でも、避難所に町人口の割を超す千九百人以上の避難者を受入れる行政の力を、実力を感じます。



放射線物質による影響の情報が少ない時に町の防災無線で、外出を控える放送をくりかえし周知したことは、屋内退避になり被ばく量の低減になったと思う。今後は、全町除染実施計画により一刻も早く除染を進めていただき、安心をとり戻したい。

「この一年を振り返って」

三春町消防団 小松 功

町民の皆様には、日頃より消防団活動への温かいご支援とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年は、東日本大震災、台風十五号による水害と自然災害の多い年でありました。火災の発生件数はひと桁台でしたが、春先には、不審火と思われる火災もあり、震災で避難されて来た富岡町の消防団の方々にも協力を頂いて、車両にての警戒に力を入れ予防消防にあたりました。火災・災害にも対応できる消防団を目指し、各種訓練を行い町民の皆様が、安全そして安心して暮らせる三春町のために日々精進し活動を行って来ましたが、今後も継続し活動してまいります。

今回の震災では、多くの事を学びました。発生直後から各町の被害状況確認（車両と徒歩により見回り警戒）。原発事故での避難者への交通誘導。避難所でのボランティア活動等を行いました。今まで経験したことのない災害に戸惑い、どのように活動して良いのか考え、我々に出来る事を見つけながら、震災時の対応を行いました。

反省点もありますが、町民の皆様から「消防団御苦労さま、頼りにしているよ」と温かい言葉を頂戴できたことが何よりの励みとなり、その言葉を誇りに思い今後も消防団活動に邁進してまいります。

最後になりますが、消防団からのお願いです。住宅用火災警報器の未設置のご家庭がありましたら早めに設置をお願い申し上げます。

「大震災！そして炊き出し」

三春赤十字奉仕団 委員長 河辺サタ子

大震災の翌三月十二日、東電福島第一原発周辺の人々が三春にも避難してきてました。ボランティアアセンタから「避難してきた人達への炊き出し要請」がありました。



訓練から得たノウハウで炊き出しはなんとかなっても、ガソリン不足で車が使えない、放射能が心配で徒歩もままならない状況下でボランティアの人が集まるのが問題でした。呼びかけで見ると誰もが心よく応じてくれました。三春には良いものがまだ残っていたのです。

炊き出しを始めてみると、一部の町民や女性団体の力ではどうにもならないことがわかりました。避難者の数が多い上、炊き出しの期間が長いのです。各地区の自主防災会も集会所等で炊き出しを始めました。自宅でも多くのおにぎりを作り、提供してくれた方々もいました。

今まで経験したことのない大パニック状態の中、行政も私達も必死でしたが皆さんの善意と協力で、避難してきた人達へおにぎりは届けられたのです。この活動を通して、三春の良さや絆の強さを再認識しました。

現在、慣れない仮設住宅で不自由な生活をしている人達に、一日も早く今の生活を乗りきり、以前の元気で明るく前向きな生活を送り戻してほしいものです。そのために、奉仕団としてできる事はないかを検討しているところですが、想定を超えた混乱の中とはいえ、問題がなかったわけではありません。もし、自分達が逆の立場だったらとか、もう少しの工夫があれば等とか考えると、活動された皆さんと問題点を話し合い、災害に備えていく必要があるのでは、と思います。

「備えあれば憂いなし。」

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から、一年が過ぎました。震災当時は、毎日の余震に怯え、放射能に怯え、着のみのままの毎日でした。いつ避難しなくてはと考えていた日々でした。三春は、地震の被害も少なく、津波の心配もなかったのですが、放射能には、敏感になっていったようです。一年前の様子は、今考えると、異常のような光景でした。マスクに帽子、長袖に身を包み、子供達の姿もなく、町中を歩く人さえも少なかったのです。

▼日がたつにつれ薄れていく震災と原発を忘れてはいけなと思う心と、前向きに行かなければと思う心が複雑です。また、未来のある子供達が安心して外で遊べる日が早く来ることを願っています。▼もうすぐ桜の季節、昨年は、桜祭りが中止になりましたが、今年は、実施するとの事、三春のすばらしい滝桜を大勢の観光客の皆さんにみただき、また、町中にも、たくさんのお桜がありますのでみていただき賑やかにしてほしいと思います。(庭山)

協会活動だより

地域部会

散策路表示板の修復作業を実施！

関 弘子

地域部会では、桜谷散策路の標柱建替えに次いで、日本化学株式会社第二工場裏門横の、龍徳院・愛宕散策路の踏査を行い、三十余年を経て、文字の読み取りが困難となった案内標柱の建替えを決めた。

復興元年となる平成二十四年を迎えた一月十日積雪中、会員の手により新しい標柱の設置が行われた。



今まで経験したことのない大パニック状態の中、行政も私達も必死でしたが皆さんの善意と協力で、避難してきた人達へおにぎりは届けられたのです。この活動を通して、三春の良さや絆の強さを再認識しました。

編集後記

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から、一年が過ぎました。震災当時は、毎日の余震に怯え、放射能に怯え、着のみのままの毎日でした。いつ避難しなくてはと考えていた日々でした。三春は、地震の被害も少なく、津波の心配もなかったのですが、放射能には、敏感になっていったようです。一年前の様子は、今考えると、異常のような光景でした。マスクに帽子、長袖に身を包み、子供達の姿もなく、町中を歩く人さえも少なかったのです。

▼日がたつにつれ薄れていく震災と原発を忘れてはいけなと思う心と、前向きに行かなければと思う心が複雑です。また、未来のある子供達が安心して外で遊べる日が早く来ることを願っています。▼もうすぐ桜の季節、昨年は、桜祭りが中止になりましたが、今年は、実施するとの事、三春のすばらしい滝桜を大勢の観光客の皆さんにみただき、また、町中にも、たくさんのお桜がありますのでみていただき賑やかにしてほしいと思います。(庭山)

コミュニティだより

「三春わが街」第六十三号

発行日 平成二十四年三月三十一日

発行 三春まちづくり協会

編集 三春まちづくり協会

広報部 会

三春町字大町一七八

(六二)三九八八